
二人の恋、二つの愛

継那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の恋、二つの愛

【Nコード】

N7658I

【作者名】

継那

【あらすじ】

耳が痛くなる程高いブレーキの音、焼けたゴムの匂い。

それと共に人が舞った。空を舞った。自分が姉と呼称した人、真っ赤に焼き付く記憶。

そして……問題なく日常を送る少年と双子の姉のような存在、双子型恋愛ラブコメです。

始めに

衝突。

人が舞った。

その光景を僕は眺めていた。地面に着地して動かない少女の姿を網膜に焼き付けていた。

一体何が起きているのか理解できない。ゴムの焼けた匂いと、震える足と腕と、歯がガチガチ鳴っている。

ああ、そうか。車に轢かれたんだ。僕をかばって、だから僕は無事でお姉ちゃんは冷たいアスファルトに倒れてるんだ。

なら、これからどうすればいいんだ？これから夕飯を一緒に作るんだよ？それで……それで？それそ、ソレソレソレで……えと、だから、あ、あの……だから、ウゴイテよ。

ほとんど焼けついて使い物にならなくなった頭から出た願いが叶ったのか、お姉ちゃんは両腕で突っ張って体を起こそうとしている。だが、産まれたての小鹿のように立ち上がれない。

手が何かに滑ってるような感じ、腕も、服も、顔も、真っ赤に染まってる。夕焼けに焼かれたその姿は凄惨で当たり前にとこまでも悲惨で、動けない僕はどこまでも惨めだった。

「……………えへへ」

彼女が笑っていた。何故笑ってるのだろう、全く解らない。面白いことなんて一つもない。

「ゆづり……くん……」

次にゆづりくんと僕の名前、彼女からの呼称を呟いた。そこで僕の記憶は切れる。ここでよく比喩に使われるテレビのスイッチを切ったように、ではなくゆづりくんと記憶が薄れていくのだ。辛い痛みを胸に傷として残しながら消えていく。

二つの始まり

突然だが『恋愛』そんな二文字が関係した物語は決まって主人公が目覚めるところから始まる気がする。朝は可愛い女の子に起こされ、学生であれば一緒に登校、お昼はワイワイきゃぴきゃぴ(?)しながら女の子が作った弁当を食べるのだ。

何が言いたいかと言うと、それが夢だったりする。ベタツベタな恋愛物語が大好き大好きな僕はそんな展開が来たらとか思いながら十六年を過ごしてきた。

だから、僕は寝続ける。そう、きつとそろそろ可愛い女の子が部屋に入ってきて『悠くん、もうまだ寝てるの？私がいないと駄目なんだから』みたいなテンプレな台詞を言って起こしてくれるのだ。

「マダネテルノ？ 本当にそのまま永遠に寝てればイイノニ」

「違うだろ！ そうじゃないだろ！ 貴様は間違っている。大きく間違っている！ なんでわからくほお！」

飛び起きて突っ込みを入れるが、腹に広辞苑を突っ込まれた。

布団の上で腹を抱えて蹲っていると、肩にポンと手を置かれる。

「もう朝だからそろそろ準備しようか？ 悠くん」

「ヤー、恋姉さん」

これが今日の桜井悠はくわいゆうの目覚めである。今日の、なんて言ったがこれ

が平日毎日展開される朝の光景だったりする。

桜井悠、太つてはいない、だが筋肉質ではない。背は………高くはない。視力まあまあ、運動神経それなり、これ以上僕の語るのによそう。虚しい、だって後は予想できそうだ。

「あー、悠くんやつと起きたな？ あんまし遅いとお父さんとお母さんとおじいちゃんとおばあちゃんと私とゆうくに怒られちゃうんだよ？」

「長いわっ！ 多いわっ！ 朝が遅いくらいでなんでポコポコに怒られるんだよ！？」

「えへへ、じゃあゆうくに怒られて朝御飯にしよう。メッ！」

……………このアホな台詞を言いつつ、謎の僕と同じ名前のゆうくんを操る女性逢瀬愛さん。お気づきかも知れないが先程僕を起こしてくれた人となんと、なななんと双子だったりする。ちなみにその人は逢瀬恋無論勿論あだ名は恋愛姉妹である。

最後に付け加えるとゆうくんは犬の縫いぐるみ、掌サイズで愛姉さんがいつも持ち歩いてる謎のアイテムである。名前とか名前とか名前とか。

「愛ちゃんお腹減ったよ。」飯にして学校行こ」

「うん、悠くんのネクタイちゃんとしたらね」

「……………僕の制服にはネクタイなんてあったかな？」

「やーん、だってえ朝は大好きな人のネクタイしめて、行ってらっしゃいのチューまでが夢なんだもん」

なんだもんじゃねえよ。少なくともさっきまでベタな恋愛物語の夢を語っていた男が言うことでもないが。言わずもがな恋愛物の関しては愛姉さんからの影響だ。むしろ英才教育。

「ラブコメは後にして早く食べなきゃ遅刻する」

恋姉さんの突っ込みでようやく朝食が始まった。いつの間にか恋姉さんは机に肘を乗せて皆の分の麦茶をいれて退屈そうにしていた。一体いつの間に！？何が言いたいかと言うと手際の良い人なんだよってこと。

僕は恵まれているらしい。友人達によく言われる。ベタな恋愛物語を夢見る事は周知の事実だったりするのだが、美人の双子に囲まれて世話されてんだから夢叶っとるやん。と、謎のエセ関西弁で言わ

れた。

決まって僕はこう返す。夢は夢であるから輝く、手に取ると輝きはあせて、残るのは空虚さ。ニヒルを気取って言うて決まって突っ込みを受けるのは内緒だ。

世話されてんだから、と言ったが、両親は共に海外で仕事していたりする。十六歳の少年を『愛ちゃんと恋ちゃんがいるから大丈夫よね』と言い残して消えた母と『大人階段を昇りたいなら焦らないことだ』と言いやがって消えた父、まともな人は僕の両親ではないらしい。

そこから基本的にやる気を出してるのは愛姉さんだ。恋姉さんは仕方なくと言った感じで、だけど感謝してるし、勿論当たり前だとも思ってない。やれることは自分でやるつもりだ。

「お弁当持った？」

「持った」

「ハンカチとティッシュと鞆は持った？」

「持ちました」

「制服は着た？」

「着ましたよ」

「寝癖は大丈夫？ 歯は磨いた？」

「オツケー」

「本当にお弁当は持った？」

「いい加減にしろ！！ 半分くらい見りゃわかる内容を混ぜやがって、怒るぞこんちくしょう！」

「怒ってるじゃん」

冷静に恋姉さんが麦茶をすすりながら突っ込みをいれてくる。愛姉さんは僕が怒鳴ると目尻に涙を溜めて、唇を尖らせた。

「そ、そんなに言わなくても……… 悠くんのお姉ちゃんとして心配で心配で……… 私迷惑かなあ？」

「すみませんでした」

桜井悠、全面降伏である。どうしても涙には弱い。

「涙と言つより愛ちゃんに弱いだけじゃん」

その通り。

「うん、じゃあ出発しよう！」

愛姉さんは腕を振り上げ笑顔で出発を促した。長い朝の行事を終えようやく学校へと出発である。

ここで遂に遂に、勿体振る程でもないが恋愛姉妹の見分け方を教えちゃおう。二人とも髪が長いんだが、ポニーテールにしてるのが恋姉さん、そのままなのが愛姉さん、はい簡単。

「今日も安全に出発」

そう言っただけで当たり前前に僕の右側に愛姉さん、当たり前前に僕の手を取る。左側は恋姉さん、左手は鞆を持ってるので手首辺りを捕まれる。鞆はランダムで右左適当に持つので、その場合はこれが左右が変わるだけ。

捕まった宇宙人のように登校、というかこれじゃ連行。誤解されない内に言っておく、恥ずかしいよ？最高に恥ずかしい。何度も拒否してるよ？試しに言ってみようか？解りきった感じで返ってくるから。

「あ、あのう。お姉様方、手を繋ぎながら登校は恥ずかしかったりなんかしっちゃったり……………」

右を見る。愛姉さんが古い少女漫画のワンシーンのように白眼で驚いている（イメージ）。

左を見る。あんまり表情は変えてない。だが、目が『ふうん、そんなこと言うんだ』なんて言ってる。

「だって、だって寒いよ？ もう十二月だよ？ 風邪ひいたら大変だよ」

必死になって顔を寄せて熱弁する愛姉さん。論点がよくわからない。

「いや、だから恥ずかしかったり……」

「昔からじゃない。今更恥ずかしがってどうすんの？」

静かな突っ込み。右は動、左は静、右は温、左は冷、真ん中は大変だ。

中学生になってからあの手この手でこの朝の定例行事を回避しようとするが許されなかった。

今更確認だが、この二人は年齢は僕の一つ上のである。小学から中学、中学から高校とそこで生じる学年のズレは分岐点まで、ということを手をつたれたと説明しとこう。

更に補足、僕達の両親はアホ程仲が良くて、ほぼ産まれた時から僕達是一緒にいたりする。

「やっぱり高校は一緒に良かったわよね」

恋姉さんからの発言、

「うんうん、だって悠くんいないとつまないもんね」

愛姉さんが返す。

「僕は別に……………」

さっきの手を繋ぐ事に関しての僕の発言のリアクション再来。

これのどこが恵まれてるっていうんだ。頭を抱えたかったが手がいうこと聞かないのでイメージで。

「さあお待ちかね毎度恒例！ 下駄箱チェック！」

「ドンドンパフパフ」

頭痛い。ようやく解放された両手を使って頭を抱える。

宣言通り、毎度恒例で毎朝下駄箱チェックしてるのがこの恋愛姉妹である。ちなみに謎のドンドンパフパフは恋姉さんが言っている。

要はラブレターチェックらしい。今まで一通も入ってた事はないけど。

「あのね、いつもいつも言うけど美人で有名な双子に連行されてくる男ラブレター出す人なんてそうそう……………」

その世界が固まった。

「……………なんで沈黙するのかな？」

「まさか!？」

あれ?なんで扉を開けると、上履きの上に手紙が載っかってるんだ?

「にゃあああつ! 悠くんラブレターもらったあー!」

両手を上げて愛姉さんはグルグル回っている。奇声付きで。

「……………」

恋姉さんはブツブツとなにか言っているが、結構近くにいる筈なのに全く内容は聞こえない。

とりあえず上履きと手紙を取り出し、靴をしまって、手紙の裏表を確認してみる。何も表記なし。

「流石にここじゃ開けないな。ほら、姉さん達行こうか……………あれ?」

二人の姿が消えていた。手紙を見る短時間で音もなくなりなくなっていた。溶けてしまったのかと思って足元を見たがやっぱりいない。

「本当にラブレターなのかこれは?」

階段を昇りながら、気になってしまっただけで仕方ないので、トイレに行っただけで個室を開ける事にした。

結論、ラブレターっぽい。いや、ラブレターだろう。ラブレター……
……そろそろゲシユタルトさんが崩壊しそうだ。

昼休み愛姉さんが作ってくれた弁当の包みを開けながらそんな事を
思う。

放課後に屋上に、なんて情緒溢れる誘いだ。やはりとりあえずは行
ってみるか、友達の悪戯の可能性は捨てきれないが。

「悠さん。今日も逢瀬姉妹の愛溢れる弁当ですかい？」

「本当に羨ましいです」

最初に発言したのは一条善人いちがうぜんじん僕は名前負けと呼んでる。

次に敬語だった人は真宮早恵まみやはやえツインテールが似合うドSさん。

なんとこの二人恋人同士だったりする。つまり、善人はマゾか……

「待て！ 俺はマゾじゃない。そんないじめられて興奮はしない」

「あらあら、善人さん、そんな事を言っちゃうとお昼は抜きですよ」

「マゾです。でもご飯だけは食べたいです」

「はい、良くできました」

僕の周りには僕に癒しを与えてくれる普通の人はいないらしい。

「前々から思うのだが、二人は恋人なんだから二人で昼食えばいい
だろ？ なんで態々僕と席をつけてまで食うんだ？」

善人とは中学が一緒だと言うこともあり、高校入学当初から仲良く
してるが、善人が夏に真宮さんと付き合うようになって僕との付
き合いは変わらなかった。何故か、二人に真宮さんが引っ付いてく
る感じだった。

「うう……………早恵、悠が酷いんだ。もう友情は終わりだと言うんだ」

態とらしく、いや、態と真宮さんの胸で泣き真似を始める善人。

「善人さん、諦めないで。今はツンデレのツンなんです。クーデレ
のクー、デレはもうすぐです」

クーデレはなんだか違う気がする。いや、こんなところは突っ込ま
なくていいな。

善人の頭を撫でて慰めている真宮さん。

「……………善人そろそろ手が出るぞ」

「そっぴゃ、悠、お前ラブレター貰ったんだって」

変わり身早いな。

って、あれ？なんで善人がラブレターの事知ってるんだ？

「さっき逢瀬さん達が私達に知ってる事はないかと聞いてきましたよ」

……………探ってるよ。相手探ってるよ。恋愛姉妹は何がしたいんだよ一体全体。

「貰ったには貰ったが、まあ断るよ。よくて友達になる」

「ええ、私もそれがいいと思いますよ」

「ええー、付き合っちゃえばいいのに、もったいないよ」

弁当をつつきながら唇を尖らせる善人、つか、いつの間に食事始めてんだよ。

真宮さんも笑って弁当つついてるし。

その時善人の双肩に手が出現した。小さく綺麗な手、見覚えがある。

「善人くん、あんまり余計な事言っちゃうと……………お姉ちゃんがお仕置きしちゃうよ?」

「オア折檻」

結果はただでは済まない、と。

「逢瀬先輩駄目ですよ。善人さんを調教……じゃなくていじめるのは私なんですから」

真宮さんの笑顔が冷たくて恐ろしく怖かった。善人は本当にマゾなんだと理解した今日の昼。

恋愛姉妹も来たのでようやく食事が始められる。先に食べると言わずもがな文句を言われるのでこうして忠実な犬のように待っているのだ。

一体どんな娘がコレを出してくれたんだろう。期待に胸膨らませながら僕は放課後を待った。

二つの真実

重い鉄扉を開けて、屋上へと進み出る。夕焼けが目に染みて思わず手で陰を作る。

辺りを見回す。

「なんだ……………やっぱり悪戯か……………」

期待はしてなかった。そりゃ全くと言われれば嘘になるけど、やっぱりベタな恋愛物語を望む僕としてはこんなシチュエーション望みまくってる事なのだが。どうやら今回は何もなし。

「早かったわね」

「えっ？」

その声が聞こえた方に振り返ると人が空から降ってきた。

流石にそれはおかしいと思って視線を人より上に上げると、給水塔、どうやらその辺りから跳んだだけらしい。十分に危ない。

「君がコレをくれたの？」

僕は持ってきたラブレターを見せる。

やっと相手を確認するが、髪が長くて前髪で表情がよく読み取れない。あんな前髪じゃ不便だろうに、それが第一印象。

「そつよ。ちよつとアナタと話がしたくてね」

うん？何だかこれから告白されるような空気じゃないな。威圧的で高圧的な態度が彼女からは滲出てる気がする。

そんなことを考えてると彼女はゆっくりと此方に近付いてきた。

「ねえ、桜井悠、アナタは事故にあった事がある？ いえ違つわね。事故を見た事がある？」

事故？急におかしな事を聞いてくるな。

「いや、ないよ。つか、こんなことを聞くために態々呼び出したのか？」

「ええ、大事な事なの。後、年上には敬語を使うべきね」

彼女の口許が笑った。年上だったのか、それと何が面白いんだ。

「……………あるのよ。事故あったの」

会話が続かなくなつて、冷たい風に身を小さくしてたら風に消え行きそつな声で聞こえた。

まるで自分にも言い聞かせるように彼女は呟く。

「貴方が、ですか？」

指摘された事なのでちよつと遅れ気味ではあるが、敬語を付け足す。付け足す物ではないが。

「いいえ、桜井悠がよ。正確には桜井悠が姉と呼んでた人が」

「なに言ってるんですか？ 全く意味が解りません」

なんだこの人、怪しいとは思ったが電波か、それか誰かと勘違いしてるのか。

同姓同名の桜井悠さんそろそろ出てきて代わってください。

「うん、信じれないよね。でも、事実だから」

そう言っただけ彼女は更に一步僕へ踏み出し、細くて小さな手が僕の頬に触れた。

バチッ！

静電気が起きたような音、どこで、触れられた所？ 違う頭の中だ。

バチッバチッ！

断続的に頭の中で電気の音が続く。

「ゴホッ、ゴホッ……………があ……………」

僕は立つてらんなくなつて膝を付く。世界がグルグル周り、吐気と頭の痛みだけが僕の中で弾け続ける。

「辛いね……………辛いね、もう少しだから……………頑張つて」

のたうち周りそうになつて僕の頭を彼女は優しく抱いてくれた。

顔は見えないが、泣いてる気がする。

電気の音がする度に何かの映像が頭に流れ込んでくる。焼き付いた赤と、流れる赤と、壊れそうな赤。

赤と朱と緋、夕焼けと血と記憶、

「……………があああああ！」

自分でも意識はしてないのに急に口が吠えたと思ったら、痛みが終わった。消えた、あれほど痛かった頭がスッパリ消えたのだ。

残ったのは十二月だというのに馬鹿みたいな汗をかいてる自分、息も整えられなくて荒い。

「なに、これ？」

「思い出した？」

「ああ、思い出したと言えば。この記憶なんだよ、いつ起こったのかも、どうなったのかも覚えてない」

いい加減縫いぐるみのように抱かれてるのも恥ずかしいので、無理矢理足にいうことを聞かせて立ち上がる。汗をかいたせいで十二月の風が酷く寒く感じる。

「でもあつたのは事実、アナタが慕う双子の内どちらかが事故にあったか、はたまた全く違う人を姉と呼んで、あの双子は偽者か」

「SFチックだな。でも、全部ちゃんと記憶あるし、あの双子は昔

からの僕の姉さんだ」

彼女は自分の頬に手を当てて何かを考える仕草をする。

「その記憶も偽物かも、一つだけ私が言える事は今この世界は間違っている。あの事故がなかった事になり、世界が帳尻を合わせた姿が今。もしかしたらあの双子は双子じゃないかもしれない」

『もしかしたらあの双子は双子じゃないかもしれない』本当に電波な会話だ、痛々しい、でも思い出した以上は何も言えない。この記憶が嘘じゃないのは不思議と確信だった。

「君は誰？ ですか？」

そういえば敬語を忘れてた。いつの間にか普通に喋ってしまった。

「私は私、さっきはああ言ったけど敬語はいいわ。自分でもよくわからなくてね、このズレた世界がアナタの記憶が綻びになってる事だけを知って、世界を直す事だけを使命にされた謎の人よ」

「謎の人ねえ……………名前教えて欲しかったんだけどな」

「ほしなみさめ
保科美雨」

名前だけ言うと彼女は踵を返し、屋上の鉄扉へと歩いて行ってしまった。

「待ってよ保科さん」

なに勝手に帰ろうとしてるんだ。こっちはまだまだ聞かなきゃいけない事が山ほどあるんだ。

「美雨、名前がいい」

保科さんは背中を向けてそう言った。

「なら改め美雨さん………とりあえず一緒に帰りませんか？」

「……………」

振り向いた彼女の表情はやっぱり長い前髪で読み取れはしなかった。

「うふふ……………」

何やら謎の暗いオーラを発しながら、ハンバーガーを食べてる女子高生、異質である。

帰りを誘いはしたが、美雨さんがどうしても言うので少し周り道をして駅前のファーストフード店へと移動した。

「ハンバーガー好きなんですか？」

こっちはフライドポテトをもぐもぐしながら言ってみる。

ズビシツ！と擬音がつく位ハッキリと人指し指を指された。

「ハンバーガー最高、ハンバーガー勝利、後、敬語いらない」

最初は自分から敬語使え言つたのに……………

「結局美雨さんが何者か解りません。学年は？」

「一つ上、ちなみに双子と同じクラス」

「あれ？ 居ましたか？ よく行くんだけどな、あのクラス」

流石に前髪で顔隠してる女子生徒なら、嫌でも目に入って覚えられる自信があるぞ。

「それも綻び、私が姿を現したのは最近、気付いたらアナタの記憶と共にあそこにいた」

「……………まじで不思議な話になってきた」

本気でこの会話聞かれたら病院に送られそうだ、精神的な。ちょっと隅っこの席を取っておいて本当に良かった。

整理すると、彼女、美雨さんの話を全て肯定すると、

・僕は姉と呼んでた人が車に轢かれるのを目撃している。

・だけどそれが誰だか思い出せない。

・僕が姉と呼ぶ人はあの双子と推測される。もしくは他の全く違う

誰か。

・ だけど今いる世界にはそんな事実は存在しない。

・ この世界が偽りで、事故あつた世界とは別の世界にいる。

・ 美雨さん曰く、あの双子のどちらかが事故にあっている可能性もあるし、実は双子じゃなくて一人で、もう一人は付け足された。

以上。

……… 付け足されたつてのが一番意味がわからない。なんで世界が綻んで人が付け足される必要がある。

「私事だけど、なんだかあの双子に違和感があるの。私みたいにいるようではない存在、もしかしたら本当の世界では一人の可能性がある……… あくまで可能性」

「……………」

「姉として慕ってるものね。認めたくないのは分かる。気分を害さないようにあくまで可能性として考えておいて」

次に、一番簡単な結果を出す。保科美雨が言ってる事を全て否定する事、それとこの記憶は美雨が超能力か何かで植え付けてきた。と無理矢理こじつければ全部終わる。

世界が偽物だ、なんて突拍子もない事を言ってるんだ。超能力くらい言っても何も問題ないだろう。

「ゆっくり考えなさい。私もどうなるかわからないんだから、なにしても元の世界に戻せないかもしれないし、このまま放っておいたら勝手に戻る可能性もあるし、可能性の話をしたらそれこそ無限」

「あれ？ えっ？ 置いてくんですか？」

気付けばセットを平らげてる美雨さんは、まだハンバーガーを半分しか食べてない僕を置いて席を立った。

「……………おトイレよ。ばか」

ああ、今のは表情が見えた。頬を少し赤くしてた、うん、少し可愛いと思ってしまった。

そそくさで行ってしまった美雨さん、残された僕はハンバーガーを食べながら考える。

あの二人が嘘、片方が嘘、もしかしたらどちらも本当……………怖かった。昔からの記憶が否定されて怖かった。でもこの焼き付いた赤い記憶嘘じゃない。否定したいのにこれは事実だ。

誰も困っちゃいない、いる人はいるし、誰もいなくなってる。だったらこの世界のまま良いんじゃないか？

そんな事をずっと考えてる。……………SFな悩みだなあ。僕の色々な恋愛物語はどこ行っちゃまったんだよ全く。

「悠くん発見！」

「うわぁっ！」

肩を突然掴まれ、ハンバーガーを落とすそうになりながらなんとか踏ん張る。

頭だけ振り返ると、凄く近くに顔、またびっくりである。

「愛姉さん？　なんでここに？」

「ん、悠くんのGPS辿ったのさ。真っ直ぐ帰ってない悪い子みたいだからね」

そう言つて携帯を見せて笑つてる愛姉さん、GPSつて最近子供が被害にあつて犯罪が増えてるからつて取りつけられた子供の位置を知らせる機能だよな。

僕の携帯ついてたんだ………しかも愛姉さんに情報行くようになってんだ。少しへこんだ十六の冬。

「あれ誰かと………」

「こんにちは」

美雨さんが戻つてきた。二人が見つめあつたかと思つたと突然静かになり、何だか嫌な空気が流れた。あれ？　すつごく逃げたい。

「あれえ？　なんで保科さんが悠くんと一緒にいるのかな？　その向かいの席の鞆貴方のだよな？」

「うん、私前から桜井君の事が好きで告白したの、それでお友達になつたの。以上」

なんで少し攻撃的な説明なの美雨さん、しかもそう言って向かいの席座るし、愛姉さんと戦う気か？ いやいや理由が見付からん。

「むむむ、帰ろう悠くん。寄り道はよくないんだよ。生徒手帳にもあるし、悠くんを不良さんしたくないし私」

何だか機嫌の悪い愛姉さんは僕の肩を掴んで無理矢理立たせる。恋姉さんの方が直ぐに手が出たりするが、実は愛姉さんの方がずっと力が強い、格闘技も昔やってたし。

筋肉質ではない軽い僕はなんの抵抗もなく立たされ、鞆を持たされ引っ張って連行される。

「あ、あの、美雨さん。後で連絡しますから」

「悠くん！」

怒鳴りつけられ更に小さく軽くなった僕はそのまま退店される。

最後に美雨さんが笑った気がした。

「悠くん、保科さんは駄目だよ。何だか怪しいし」

た、たしかに………第一印象に怪しさを意識しやすそうな人だし、後で謝ろう。

「告白してきた人を邪険には出来ないだろ」

そう美雨さんが言っていたので話を合わせておく。本当は覚悟するまで恋愛姉妹には会いたくなかったんだけどな。

「とにかくあまり寄り道しちゃ駄目だよ。するならお姉ちゃんね」

ああ、保護者だからいいってか……………

いつもと一緒に、昔と変わらない愛姉さん、『昔』『昨日』『過去』
それが嘘なんて思いたくない。事故がないこの世界、事故があった
世界はどうなるんだ。轢かれた姉さんはどうなったんだ……………死ん
だのか……………なら、今のこの毎日常が一番良いんじゃないか？
やっぱり。

解らない判らない分からない。

今、自分が立ってる足下が本当か嘘かなんて確かめたくない。嘘で
も立ってる事実があるなら、それでもいいと思ってしまう。

二人の日常

愛姉さんは夕食の支度、恋姉さんはテレビ、僕は宿題、それぞれの持ち場(?)について作業を始める。一人のテレビに作業はいらんのだが、突っ込みはいれないでほしい。

やる気満々の姉Aは宿題をしてる時は必ずやって来てあーだこーだ言うてくるので、最近の僕は姉Aが夕食の支度やら、風呂やら手が離せない時に自室で宿題をやるのが日課だった。

あの双子、成績はとても良い、愛姉さんはわかるのだが、恋姉さんは理解できない、理解不能。基本的にテレビ見たり、ドラマ見たり、バラエティ見たりしてるし。テレビ大好きっ娘だ。

テレビにそんな隠れた力があるのか？

たしかに知識が入る媒体ではある。しかし、手に入る知識は基本的に雑学が基本かと思う。僕もテレビは大好きだから何も言えませんがね。

耽つてないで宿題宿題。

「悠くん」

ドアが突如開かれ、恋姉さんが顔を出した。

「とりあえずノックくらいしようよ。それでどうしたの?」

「宿題を手伝いに、愛ちゃんが行けて」

双子の姉妹という特性を生かした遠隔攻撃だと！？流石は愛姉さんだぜ……………

ちよつと少年漫画みたいなノリにしてみたが、内容が生活感ありすぎて駄目だな。

「なに、百面相？ 何だか驚いてみたり苦い顔してみたり、何かを納得したみたいにうんうん頷いたり」

冷静に一つ一つ片付ける突っ込みを入れられると結構くるものだね。何だか心が軋むや、あはは。

「解らないところある？ 早く任務を遂行してテレビに戻りたいの」

「そんなにないから良いよ。こういうのは自分で調べなきゃ身につかないからね」

「偉いつ！！！！」

ボタン、と扉を壊さんばかり開けてに愛姉さんが乱入してきた。

「偉い！ 偉いよ悠くん！ そんな偉い悠くんにはおかずの唐揚げサービスプラス、私からの撫で撫でプラスゆうくんからの撫で撫でをプラスだー！」

縫いぐるみと人の手に頭を撫であげられながら僕は思う、このはしやいでる顔文字みたいな表情で喜んでるこの人の優先順位は僕が上位なんだな、と。

別に自惚れてるわけじゃない、愛姉さんは僕の両親に言いつけられた言葉の使命感で僕を優先してるんだ。

……昔からこんなだった気もしないでもないけどな。

「……………はあ、テレビ視よ」

捨て台詞を残して恋姉さんはそそくさと退散した。幽霊みたいに気配を消しながら。

僕は大きな溜め息を一つ吐いて、撫で地獄に身を、というか頭を委ねた。

「悠くんが立派な考えを持ってくれて私は嬉しいよ。やっぱり悠くんは良い子だもんね、お姉ちゃん達も鼻高々だよ」

頬を固めていた素材がなくなったように表情をふにゃふにゃにして笑いながら、愛姉さんは相変わらず僕を褒めていた。

「愛ちゃんそろそろいいでしょ。お腹減ったよ」

もう限界らしく恋姉さんが疲れた表情で愛姉さんの言葉を区切った。

疲れた表情なんて言ったが、当事者の僕すらもそろそろ疲れて、多

分全身で疲れを体現してる。

「えー、ちゃんと良いことした時はしっかり言わないと。勿論悪いことしたら戒めを込めてもっと言わなきゃだけどね」

最後に『悠くんは悪いことなんてしないよね?』という笑顔と視線と発言を残して愛姉さんは食事を始めようと箸を配り出した。

表情や視線だけでなくやっぱり言葉にしてんじゃん、って突っ込みは置いておいて欲しい。

箸を独占されて、兵糧を攻撃されている我が軍は全面降伏しかないのだから。

恋姉さんと同時に僕は溜め息を吐いて、恋姉さんと顔を見合わせ二人で小さく笑った。

「えっ? なになに? なんで二人で笑ってんの!? なんでなんで私は除け者?」

そんな事を言っつて愛姉さんが泣きそうになってるが、箸を手に入れた我が軍は涙程度では屈しない。

………嘘、嘘です。流石に泣かれたら勝てません。というか泣く前に降伏です。

「いや、姉さんは可愛いなって」

誤魔化しに言ってみた。

「え？ えへへえ……………」

気分が悪いくらい嬉しそうだ。

「しかたないなあ、唐揚げさらにプラスだ」

「さんきゅ」

そんな僕達のやり取りを見て、恋姉さん再度ため息を吐くのだった。

あれ？

何かおかしい、目の前で二人の女の子が笑ってる。でも、僕には違う映像が映る。

バチッ！

まただ、また頭の中で何かが弾ける。

弾ける度に違う映像が今の世界に割り込むように映る。

バチッ！

「ねえ、僕と愛姉さんと恋姉さん、後誰かいなかった？ いつももう一人いて、一緒にご飯食べてなかったっけ？」

はい？なんだこれ？

僕の声、僕の口、僕の体が勝手に何か口走っている。もちろん僕は、

この言葉を意識して言ってなんかいない。

バチツ、という音と共に反射的に体が勝手にやっているんだ。体と意識が乖離してしまったような、飛んできたボールを避けるような感覚。大きな違いは『危ないと思う前に体が避ける』のと『危ないと思う筈なく避ける』今は後者に近いだろうか。全く僕はこの言葉を言いたくはないのだから。

恋姉さんも愛姉さんも僕の意識と同じ顔をしている。

「もう一人？ 悠くんのお父さんとお母さんがいたら話は別だけど、もう一人って言われると分からないよ」

そりゃそうだ。僕だって全く理解できないのだから。

「大丈夫？ 漫画の読みすぎゲームのやりすぎじゃない？」

そんな風に言ってくれる恋姉さんがこの時はひどく助かった。

ようやく動かせるようになった体で、僕はその言葉に軽口で対応して、何の味もしなくなった夕食を終えた。

夜、双子は帰宅し、静かになった一人では広い家の自室で電気もつけずに窓から外を眺めていた。

窓から見える景色は高所から見下ろすように見える町並みなんてわ

けはなく、お向かいの上林さんの家だ。

ただ今は何をするでなく、ボーッとしていたい、頭の中を真っ白に出来ないとしても頭の回転を鈍くすることは考えなければできると思った。

まあ、当然そんな事はないらしい。頭は勝手に働いてさっきの情報を押し付けてくる。それを考え、頭を回転させなければ頭のダムは決壊、崩壊してしまうだろう。

考えたって答えなんて出るわけないんだから、考えても無駄、でも考えなければ、そんな思考さえ頭を悩ませる。

僕は布団に入って頭のスイッチを強制的に落とす事にした。絶対にこんな状況じゃ寝られるわけはないだろうと思ったけど、体も眠る事で精神の崩壊を止めようとしてくれてるらしい、僕はすんなり眠りに落ちていった。

悠、本当に悠は私にぞっこんだね、ぞっこんらぶ！

うっさいな。そういう君はどうなんだ？

ぞっこんらぶだよ！

バカっぽいな。

うん、ぞっこんバカだよ。

なんだよそれ。

じゃあさ……………

砂嵐、暗転、テレビと一緒に、いや、テレビが一番イメージしやすかっただけだろう。

僕はそんな幸せな情景を第三者として見ていた。情景なのだから、僕が関係ないわけない、だって、名前を呼ばれたし、あの悠は間違いない僕なのだから。

「やあやあ、元気かな？ あつ、そんなわけないか」

そんな無情で風情のない夢の中で一人の少女に出会った。

夢だとわかってるのに、今は随分頭が回る、自分の意思をはっきりさせられる。

「やあやあ桜井君、どんな気分だい？ 自分があるのかないのか、

事実なのか虚構なのか、生きているのか、死んでいるのか」

最後の問いだけ深く僕に突き刺さった。

なんで、なんで生きている僕がこんなに動揺する？心臓が早鐘のよう
に鳴っているのはなんでだ？

「君は誰？」

僕が悪夢の中で出せた言葉はこの一言だけだった。

「女神様だよ。あなたの恋人も兼業してますがね、シシッ」

彼女の奇妙な笑い方だけが妙に耳に残った。

朝の目覚めは最悪の中の最悪、とてつもなく頭が重い。

「風邪ひいたかな」

理由はもちろんわかっているのだが、態と口に出して体が理由を錯覚しないか試してみたが見事失敗。

「クソツ、なんだってんだ……………」

昨日の夢、夢らしく纏まりはなく、夢らしく適当で、夢らしく意味不明。

一体何がズレてるんだ。何がおかしいんだ。

おかしいという前提は捨てきれそうもない。おかしい世界でなければ、あの時の屋上での映像や食事の時の映像、後夢が説明つかない。また思考のループに陥りそうになった僕は、頭を切り替えるために着替えて、階下に下りた。

「あつ、悠くんおはよ！ 早いんだねえ、やっぱり悠くんはいい子だ」

朝から元気溍刺天真爛漫の愛姉さんは僕の頭を撫で回しながら高笑い。なんだか救われる気がする。

今こうして撫でられるのが、壊れそうな現実という認識を再確認しているような気分になれた。

「悠くん……………やほ」

「恋さん、朝の挨拶はそれじゃおかしいですよ」

場所は居間、朝食の準備が着々と進んでいる様子、台所から現れたこの人は誰だ？

恋姉さんの横に立って気持ちのいい笑顔をしているこの女の子は誰だ？

「君は……………誰？」

こんなテンプレな聞き方が今の僕に出来る最大の行動だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7658i/>

二人の恋、二つの愛

2010年11月17日10時05分発行